二人を乗せた蝶は，黒い羽に水色のラインが入った，アオスジアゲハという種類の蝶でした。マヤは，蝶に話しかけました。

「ねえ，蝶ちょさん，どうして，わたしたち，ここにいるの？」

「だって，あなた，言ったでしょう。『こんな蝶にのって空を飛ぶことができたらどんな気分なんだろうね。』ってだから，二人を乗せてあげよう・・・って，思ったんですよ。わたしは，子どもが大好きだからね。それに・・・・」

「それに，何？」

「いや，実は二人にお願いしたいことがあるのです。」

「お願いしたいことって？」

と，ケンがたずねました。

「今はまだ秘密です。さあ，まずは，わたしたちの住む森へ二人を案内しますよ。」

と，アオスジアゲハは答えると，羽を大きくはばたかせてスピードをあげました。

「ぼくの名前は，ケンって言うんだ。こっちはケンがたずねると，マヤ。君の名前は？」

「わたしの名前は，エルム。よろしく。」

薄暗闇をしばらく飛び続けると，やがて朝日が昇るときのように空が白み始めるのが見えました。

「さあ，もうすぐわたしの住む森に着きますよ。」

エルムは，そういって微笑むと，森に向かって大きく羽をはばたかせました。

ケンとマヤをのせたエルムは，黄色いを羽ばたかせてスピードをあげました。

「よしょう。」

と，ふっと息を吐きました。

二人は，森に着きましたとしまして一休みすると，花の蜜をすっかり，花の花から下ろすと，